

瓶詰地獄

夢野久作

青空文庫

拝呈 時下益々御清榮、けいがたてまつりそうろう 奉慶賀候。のぶれば 陳者、かね 予てより

御通達の、潮流研究用と覚おぼしき、赤封ふうろう蠟附きの麦酒瓶ビール、拾得次

第とどけつげ届告仕る様、島民一般に申渡置候もうしわたしおきそうろうところ 処、此程、本

島南岸に、別小包の如き、樹脂封蠟附きの麦酒瓶ビールが三個漂着致し

居るを発見、とどけいでもうしそうろう 届出申候。右は何れいざも約半里、乃至ないし、一里

余を隔てたる個所に、或は砂に埋もれ、又は岩の隙間に固く挟ま

れ居りたるものにて、よほど以前に漂着致したるものらしく、中

味も、御高示の如き、官製端書はがきとは相見え、雑記帳の破片様の

ものらしく候為め、御下命の如き漂着の時日等の記入は不可能と

被ぞんぜられそうろう為存候。然れ共、なお尚何かの御参考と存じ、三個とも封瓶の

まま、村費にて御送附申上候間、何卒御落手相願
もうしあげそうろうあいだ
 度、此段得貴意候 敬具
きいをえそうろう

月 日

海洋研究所 御中

××島村役場※

◇第一の瓶の内容

ああ……この離れ島に、救いの舟がとうとう来ました。

大きな二本のエンツツの舟から、ボートが二艘、荒浪の上におろされました。舟の上から、それを見送っている人々の中にまじ

つて、私たちのお父さまや、お母さまと思われる、なつかしいお姿が見えます。そうして……おお……私たちの方に向つて、白いハンカチを振つて下さるのが、ここからよくわかります。

お父さまや、お母さまたちはきつと、私たちが一番はじめに出した、ビール瓶の手紙を御覧になつて、助けに来て下さつたに違ひありません。

大きな船から真白い煙が出て、今助けに行くぞ……というように、高い高い笛の音が聞こえて来ました。その音が、この小さな島の中の、禽鳥とりや昆虫むしを一時に飛び立たせて、遠い海わたなか中に消えて行きました。

けれども、それは、私たち二人にとって、最後の審判の日のらっぱ

よりも怖ろしい響ひびきで御座いました。私たちの前で天と地が裂けて、神様のお眼の光りと、地獄の火焰ほのおが一いつとき時に閃ひらめき出たように思われしました。

ああ。手が慄ふるえて、心が倉皇あわてて書かれませぬ。涙で眼が見えなくなりす。

私たち二人は、今から、あの大きな船の真正面に在る高い崖の上に登って、お父様や、お母様や、救いに来て下さる水夫さん達によく見えるように、シツカリと抱き合つたまま、深い淵の中に身を投げて死にます。そうしたら、いつも、あそこに泳いでいるフカが、間もなく、私たちを喰べてしまつてくれるでしょう。そうして、あとには、この手紙を詰めたビール瓶が一本浮いている

のを、ボートに乗っている人々が見つけて、拾い上げて下さるでしょう。

ああ。お父様。お母様。すみません。すみません、すみません、すみません。私たちは初めから、あなた方の愛いとしご子でなかつたと思つて諦あきらめて下さいませ。

又、せつかく、遠い故郷ふるさとから、私たち二人を、わざわざ助けに来て下さった皆様の御親切に対しても、こんなことをする私たち二人はホントにホントに済みません。どうぞどうぞお赦ゆるして下さい。そうして、お父様と、お母様に懐いだかれて、人間の世界へ帰る、喜びの時が来ると同時に、死んで行かねばならぬ、不倖ふしあわせな私たちの運命を、お矜恤あわれみ下さいませ。

私たちは、こうして私たちの肉体と^{たましい}靈魂を罰せねば、犯した罪の^{つぐのい}報償が出来ないので。この離れ島の中で、私たち二人が犯した、それはそれは恐ろしい^{よこしま}悖戻の^{むくい}報責なのです。

どうぞ、これより以上^{うえ}に懺悔することを、おゆるし下さい。私たち二人はフカの餌食になる^{ねうち}価打しか無い、^{しれもの}狂妄だつたのですから……。

ああ。さようなら。

神様からも人間からも救われ得ぬ

哀しき二人より

お父様

お母様

皆々様

◇第二の瓶の内容

ああ。隠微かくれたるに鑒みたまう神様よ。

この困難くるしみから救わるる道は、私が死ぬよりほかに、どうしても無いので御座いますでしょうか。

私たちが、神様の足あしだいと呼んでいる、あの高い崖の上に私がたつた一人で登って、いつも二、三匹のフカが遊び泳いでいる、

あの底なしの淵の中を、のぞいてみた事は、今までに何度あつたかわかりませぬ。そこから今にも身を投げようと思つたことも、いく度たびであつたか知れませぬ。けれども、そのたんびに、あの憐あ憫われなアヤ子の事を思い出しては、たましい靈魂を滅亡ほろぼす深いため息をしいしい、岩の圭角かどを降りて来るのでした。私が死にましたならば、あとから、きつと、アヤ子も身を投げるであらうことが、わかり切っているからでした。

*

私と、アヤ子の二人が、あのボートの上で、附添いの乳母ばあや夫妻

や、センチョーサンや、ウンテンシユさん達を、波に浚さらわれたま
ま、この小さな離れ島に漂ながれついてから、もう何年になりましたよ
うか。この島は年中夏のように、クリスマスもお正月も、よくわ
かりませぬが、もう十年ぐらい経っているように思います。

その時に、私たちが持っていたものは、一本のエンピツと、ナ
イフと、一冊のノートブックと、一個のムシメガネと、水を入れ
た三本のビール瓶と、小さな新約聖書バイブルが一冊と……それだけでし
た。

けれども、私たちは幸福しあわせでした。

この小さな、緑色に繁茂しげり栄えた島の中には、稀まれに居る大きな
蟻ありのほかに、私たちが憂患なやます禽とり、獣けもの、昆虫はうものは一匹も居ませんでし

た。そうして、その時、十一歳であつた私と、七ツになつたばかりのアヤ子と二人のために、余るほどの豊饒な食物が、みちみちておりました。キュウカンチヨウだの鸚鵡だの、絵でしか見たことのないゴクラク鳥だの、見たことも聞いたこともない華麗な蝶だのが居りました。おいしいヤシの実だの、パイナップルだの、バナナだの、赤と紫の大きな花だの、香氣のいい草だの、又は、大きい、小さい鳥の卵だのが、一年中、どこかにありました。鳥や魚などは、棒切れでたたくと、何ほどでも取れました。

私たちは、そんなものを集めて来ると、ムシメガネで、天日^{てんび}を枯れ草に取って、流れ木に燃やしつけて、焼いて喰べました。

そのうちに島の東に在る岬と磐^{いわ}の間から、キレイな泉が潮の引

いた時だけ湧わいているのを見付けましたから、その近くの砂浜の岩の間に、壊れたボートで小舎こやを作つて、柔らかい枯れ草を集めて、アヤ子と二人で寝られるようにしました。それから小舎こやのすぐ横の岩の横腹を、ボートの古釘で四角に掘つて、小さな倉庫くらみたよなものを作りました。しまいには、外衣うわぎも裏衣したぎも、雨や、風や、岩角に破られてしまつて、二人ともホントのヤバン人のように裸体はだかになつてしまいましたが、それでも朝と晩には、キット二人で、あの神様の足あしだいの崖に登つて、聖書バイブルを読んで、お父様やお母様のためにお祈りをしました。

私たちは、それから、お父様とお母様にお手紙を書いて大切なビール瓶の中の本に入れて、シツカリと樹脂やにで封じて、二人で

何遍も何遍も接吻くちづけをしてから海の中に投げ込みました。そのビール瓶は、この島のまわりを環めぐる、潮うしおの流れに連れられて、ズンと海わだなか中遠く出て行つて、二度とこの島に帰つて来ませんでした。私たちはそれから、誰かが助けに来て下さる目標めじるしになるように、神様の足あしだいの一番高い処へ、長い棒切れを樹たてて、いつも何かしら、青い木の葉を吊しておくようにしました。

私たちは時々争論いさかいをしました。けれどもすぐに和なかなおり平へいをして、学校ゴツコや何かをするのでした。私はよくアヤ子を生徒にして、聖書の言葉や、字の書き方を教えてやりました。そうして二人とも、聖書を、神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思つて、ムシメガネや、ビール瓶よりもズツト大切にして、岩

の穴の一番高い棚の上に入れておきました。私たちは、ホントにしあわせ幸福で、やすらか平安でした。この島は天国のようでした。

*

かような離れ島の中の、たった二人切りのしあわせ幸福の中に、恐ろしい悪魔が忍び込んで来ようと、どうして思われましょう。

けれども、それは、ホントウに忍び込んで来たに違いないのでした。

それはいつからとも、わかりませんが、月日の経たつのにつれて、アヤ子の肉体が、奇蹟のように美しく、つややか麗沢そだに長そだつて行くのが、

アリアリと私の眼に見えて来ました。ある時は花の精のようにまぶしく、又、ある時は悪魔のようになやましく……そうして私はそれを見ていると、何故かわからずに思念が矇昧く、哀しくなつて来るのでした。

「お兄さま……………」

とアヤ子が叫びながら、何の罪穢れもない瞳を輝かして、私の肩へ飛び付いて来るたんびに、私の胸が今までとはまるで違つた気もちでワクワクするのが、わかつて来ました。そうして、その一度一度毎に、私の心は沈淪の患難に付されるかのように、畏懼れ、慄えるのでした。

けれども、そのうちにアヤ子の方も、いつとなく態度がかわつ

て来ました。やはり私と同じように、今までとはまるで違つた………もつともつとなつかしい、涙にうるんだ眼で私を見るようになりました。そうして、それにつれて何となく、私の身体からだに触さわるのが恥かしいような、悲しいような気もちがするらしく見えて来ました。

二人はちつとも争いさかい論ろんをしなくなりしました。その代り、何となく憂うれい容がおおをして、時々ソツと嘆ためいき息いきをするようになりました。それは、二人切りでこの離れ島に居るのが、何ともいいようなないくらい、なやましく、嬉しく、淋しみしくなつて来たからでした。そればかりでなく、お互いに顔を見合っているうちに、眼の前が見る見る死蔭かげのように暗くなつて来ます。そうして神様のお啓示しめし

か、悪魔の戯からかい弄わかわからないままに、ドキンと、胸が轟とどろくと一
緒にハツと吾われに帰るような事が、一日のうち何度となくあるよう
になりました。

二人は互いに、こうした二人の心をハッキリと知り合っていない
がら、神様の責いましめ罰めを恐れて、口に出し得ずにいるのでした。万も
一し、そんな事をし出かしたアトで、救いの舟が来たらどうしよう
………という心配に打たれていることが、何にも云わないま
まに、二人同志の心によくわかつていたのでした。

けれども、或る静かに晴れ渡った午後の事、ウミガメの卵を焼
いて食べたあとで、二人が砂原に足を投げ出して、はるかの海の
上すべを這はって行く白い雲を見つめているうちにアヤ子はフイと、こ

んな事を云い出しました。

「ネエ。お兄様。あたし達二人のうち一人が、もし病気になつて死んだら、あとは、どうしたらいいでしょうネエ」

そう云ううちアヤ子は、面を真赤にしてうつむきまして、涙をホロホロと焼け砂の上に落しながら、何ともいえない、悲しい笑い顔をして見せました。

*

その時に私が、どんな顔をしたか、私は知りませぬ。ただ死ぬ程息苦しくなつて、張り裂けるほど胸が轟いて、唾のように何の

返事もし得ないまま立ち上りますと、ソロソロとアヤ子から離れて行きました。そうしてあの神様の足あしだいの上に来て、頭を搔かき撈むしり搔むしき撈りひれ伏しました。

「ああ。天にまします神様よ。

アヤ子は何も知りませぬ。ですから、あんな事を私に云ったのです。どうぞ、あの処女むすめを罰しないで下さい。そうして、いつまでもいつまでも清浄きよらかにお守り下さいませ。そうして私も………

……。ああ。けれども………けれども………。

ああ神様よ。私はどうしたら、いいのでしょうか。どうしたらこの患難なやみから救われるのでしょうか。私が生きておりますのはアヤ子

のため、この上もない罪悪つみです。けれども私が死にましたならば、
なおよさら尚更深い、悲しみと、苦しみをアヤ子に与えることになります、
 ああ、どうしたらいいでしょう私は……………。

おお神様よ……………。

私の髪かみのけ毛は砂にまみれ、私の腹は岩に押しつけられておりま
 す。もし私の死にたいお願いが聖意みこころにかないましたならば、只
 今すぐに私の生命いのちを、燃ゆる閃電いなずまにお付わたし下さいませ。

ああ。隠微かくれたるに鑒給みたままう神様よ。どうぞどうぞ聖名みなを崇めさ
 せ給え。み休徵しるしを地上にあらわし給え……………。」

けれども神様は、何のお示しも、なさいませんでした。藍色の
 空には、白く光る雲が、糸のように流れているばかり……………崖

の下には、真^{まつきお}青く、真白く渦捲^{うずま}きどよめく波の間を、遊び戯れ
ているフカの尻尾^{しっぽ}やヒレが、時々ヒラヒラと見えているだけです。
その青澄^{あおず}んだ、底無しの深淵^{ふち}を、いつまでもいつまでも見つめ
ているうちに、私の目は、いつとなくグルグルと、眩暈^{くる}めき初め
ました。思わずヨロヨロとよろめいて、漂い砕くる波の泡の中に
落ち込みそうになりましたが、やっとの思いで崖の端に踏み止ま
りました。……………と思う間もなく私は崖の上の一番高い処まで
一跳びに引き返しました。その絶頂に立つておりました棒切れと、
その尖端^{さき}に結びつけてあるヤシの枯れ葉を、一^{ひと}思いに引きたお
して、眼の下はるか^{さき}の淵に投げ込んでしまいました。

「もう大丈夫だ。こうしておけば、救いの船が来ても通り過ぎて

行くだろう」

こう考えて、何かしらゲラゲラと嘲り笑いながら、おおかみ残狼のよ
うに崖を駆け降りて、こや小舎の中へ駆け込みますと、詩篇の処を開
いてあつた聖書を取り上げて、ウミガメの卵を焼いた火の残りの
上に載せ、上から枯れ草を投げかけて焰を吹き立てました。そう
して声のある限り、アヤ子の名を呼びながら、砂浜の方へ駆け出
して、そこいらを見まわしました……………が……………。

見るとアヤ子は、はるかに海の中に突き出ている岬のおおいわ大磐の
上ひざまずに跪いて、大空を仰ぎながらお祈りをしているようです。

*

私は二足三足うしろへ、よろめきました。荒浪に取り捲かれた紫色の大磐おおいわの上に、夕日を受けて血のように輝いている処女おとめの背中の神々ことうごうしさ……………。

ズンズンと潮うしおが高まつて来て、膝の下の海かい藻そうを洗い漂わしているのも心付かずに、黄金色こがねいろの滝浪たきなみを浴びながら一心に祈っている、その姿の崇高けだかさ……………まぶしさ……………。

私は身体からだを石のように固こばらせながら、暫しばらくの間、ボンヤリと眼をみはっておりました。けれども、そのうちにフィットと、そうしているアヤ子の決心がわかりますと、私はハツとして飛び上がりました。夢中になって馳け出して、貝殻かいがらばかりの岩の上を、

傷だらけになって^{すべ}泣りながら、岬の^{おおいわ}大磐の上に這い上りました。キチガイのように^あ暴れ狂い、^な哭き喚ぶ^{さけ}アヤ子を、両腕にシツカリと^だ抱き^{かか}抱えて、^{からだ}身体中血だらけになって、やつとの思いで、^{こや}小舎の処へ帰つて来ました。

けれども私たちの^{こや}小舎は、もうそこにはありませんでした。聖書や枯れ草と一緒に、白い煙となつて、青空のはるか向うに消え失せてしまつていたのでした。

*

それから^{のち}後の私たち二人は、^{からだ}肉体も^{たましい}霊魂も、^{くらや}ホントウの幽

暗みに逐おい出されて、夜となく、昼となく哀かなしみ、切は齒がしなけれ
ばならなくなりました。そうしてお互い相抱き、慰なぐさめ、励あきらまし、
祈り、悲しみ合うことは愚か、同じ処に寝る事さえも出来ない気
もちになつてしまつたのでした。

それは、おおかた、私が聖書を焼いた罰なのでしよう。

夜になると星の光りや、浪の音や、虫の声や、風の葉ずれや、
木の実の落ちる音が、一ツ一ツに聖書の言葉を咄さやきながら、私
たち二人を取り巻いて、一步一步と近づいて来るように思われる
のでした。そうして身動き一つ出来ず、微ま睡どろむことも出来ないま
まに、離れ離れになつて悶もえてたいる私たち二人の心を、窺う視かに
来るかのように物怖ろしいのでした。

こうして長い長い夜が明けますと、今度は同じように長い長い
昼が来ます。そうするとこの島の中に照る太陽も、唄う鸚鵡おうむも、
舞う極楽鳥も、玉虫も、蛾も、ヤシも、パイナップルも、花の色も、
草の芳香かおりも、海も、雲も、風も、虹も、みんなアヤ子の、まぶし
い姿や、息苦しい肌の香かとゴツチャになって、グルグルグルグル
と渦巻き輝やきながら、四方八方から私を包み殺そうとして、襲
いかかって来るように思われるのです。その中から、私とおんな
じ苦しみに囚とらわれているアヤ子の、なやましい瞳めが、神様のような
悲しみと悪魔のようなホホエミとを別々に籠こめて、いつまでも
いつまでも私を、ジイツと見つめているのです。

*

鉛筆が無くなりかけていますから、もうあまり長く書かれませ
ん。

私は、これだけの虐待なやみと迫害くるしみに会いながら、なおも神様の禁い
責ましめを恐れている私たちのまごころを、この瓶に封じこめて、海
に投げ込もうと思っっているのです。

明日あしたにも悪魔の誘惑いざないに負けるような事がありませぬうちに：
……。

せめて二人の肉体からだだけでも清浄きよらかでおりますうちに……。

*

ああ神様………私たち二人は、こんな苛責くるしみに会いながら、
 病気一つせずに、日に増まし丸々と肥って、康強すこやかに、美しく長そだつ
 て行くのです、この島の清らかな風と、水と、豊穰ゆたかな食物かてと、美
 しい、楽しい、花と鳥とに護られて………。

ああ。何という恐ろしい責め苦でしょう。この美しい、楽しい
 島はもうスツカリ地獄です。

神様、神様。あなたはなぜ私たち二人を、一思いに屠殺ころして下
 さらないのですか………。

——太郎記す………

◇第三の瓶の内容

オ父サマ。オ母サマ。ボクたち兄ダイハ、ナカヨク、タツシヤ
ニ、コノシマニ、クラシテイマス。ハヤク、タスケニ、キテクダ
サイ。

市川 太郎

イチカワ アヤコ

青空文庫情報

底本：「夢野久作怪奇幻想傑作選 あやかしの鼓」角川ホラー文庫、角川書店

1998（平成10）年4月10日初版発行

初出：「獵奇」

1928（昭和3）年10月

入力：林裕司

校正：浜野智

1998年11月10日公開

2019年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

瓶詰地獄

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>